

ベルジャーエフのナロード観

青山, 太郎
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4253>

出版情報 : 言語文化論究. 1, pp.31-39, 1990-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

ベルジャーエフのナロード観

青山太郎

I

一国内でのエリートと民衆の断絶という現象はどこの国にも多かれ少なかれ見られようが、ロシアにおけるほどこれがはなはだしい程度に達したところはなかった。18世紀初頭のピョートルの改革は、当時西欧諸国が織りなしていた国際情勢の中でロシアが生き延び、更には列強の一員としてこれに伍していくための不可欠の措置だったのであり、この改革のめざすところは何よりもまず、少数の強力にして頼りになるエリートの形成にあった。このエリートとは、世襲にとらわれぬ能力優先主義によって選抜されたロシア人と、多くの外国人から成り、西欧風の教育を身につけ、それによりあらゆる分野にわたって支配し命令し、彪大にして無定型な農民大衆に国家の利益のための轡をはませることを任務とした。広範な農民大衆、すなわち国民の大部分は、以前と変わらぬ土俗的風習を守り続け、経済的沈滞の内にとり残されたばかりか、貴族階級における西欧化の進行、その国家的義務の漸次的緩和と反比例して、ピョートルからエカチェリーナ二世に至り徐々に拡大・固定化された農奴制により、地主の奴隷と化してしまい、「西欧的」なる言葉によって思い浮かべられるもの、教育・人権・進歩・自由思想等々の対極へと追いやられ、その結果エリートと民衆は言語の上でも宗教の上でも全く異なる二種の民を形成するに至った。以後政府の試みるいかなる啓蒙活動（教育の普及等）も、両者の間に掘られた溝を埋めつくすことはできなかった。19世紀に至り、エリートの一部がこの断絶を鋭く意識し、民衆へ歩み寄る傾向を示した結果、溝がある程度狭まったことは

事実である。ヴォルテール主義と宗教的無関心の間を漂っていたエリートの中に、キリスト教への回帰が広く見られ、また民衆も、学校の増設と印刷本の急増により、西欧的思惟に接するある程度の機会を得た。

とはいえ19世紀を通じ、西欧的文化階層である貴族階級にとって、とりわけその文化的後継者であるインテリゲンチヤにとって、民衆が常に変らぬ謎めいた存在であったことに変わりはない。彼らにとってナロード народの語は一種特別な意味合いを帯びた。ドストエフスキーもトルストイも、現代のニヒリズムへの解毒剤をナロードの内に見出しようと信じた。20世紀においてもブローク、バールイラ若いサンボリストたちは、インテリゲンチヤの脆弱な文化的表皮を一瞬のうちに瓦解させうるナロードの闇の力を予感していた。1908年シチリアの都市メッシーナとその周辺を壊滅させた大地震は、ブロークにとってナロードの内なる自然力の象徴、ロシアを待ちうけるある種の破局の象徴と思えた。ロシアの文化エリートとは、少数の例外を除いて皆、ナロードへの負い目に忸怩たる広義のナロードニキであった。ナロードの自然発生性、その暗く奥深い集団主義への跪拝は、西欧主義者ゲルツェンの内にも陰を落した。伝統的な農村共同体を基礎とし、この発展の上に西欧とは異なるロシア独自の社会主義への道を思い描かんとする所謂ナロードニキ社会主義は彼に始る。その意味で19世紀ロシアの西欧主義は著しくスラヴ主義的色彩を帯びたものであり、ナロード跪拝と手を切った「ロシア社会思想史上はじめての首尾一貫した西欧主義」（C・フランクの表現。『П・Б・ストゥルーヴェの生涯』12～15ページ）が現れるのは、1890年

代、マルクス主義のロシアへの定着によってである。

80年代末から90年代にかけて、ロシアにおける資本主義の発展が誰の目にも明かとなるにつれ、マルクス主義は革命理論としても、またこの理論に基く実際の革命運動としてもナロードニキ主義に対抗する潮流となり、1898年にはロシア社会民主労働党が結成される。90年代におけるロシアのマルクス主義を考える場合、プレハーノフ、レーニン、マルトフらに代表される政治的・社会的革命運動としての一面と並んで、Π・ストゥルヴェ、トゥガン=バラノフスキー、C・ブルガーコフ、C・フランクらに代表される「ロシア社会思想史上はじめての首尾一貫した西欧主義」としての一面が存在したことを忘れてはならず、この二面性を考慮に入れぬ限り、90年代における進歩的インテリゲンチヤの文化的覚醒がマルクス主義の伸展と結びついていた事実を理解できない。1900年代において、革命理論・革命運動としてのマルクス主義が主としてレーニンの指導の下にナロードニキの変質を遂げてゆく一方、マルクス主義を新たな西欧主義の一表現として受け入れた人々、当初から完き世界観としてのマルクス主義を多かれ少なかれ拒否していたがゆえに批判的マルクス主義者とも呼ばれていた人々は、その批判をつきつめることによりやがてマルクス主義から完全に脱却し、新たな地平へと向かうことになる。

ニコライ・ベルジャーエフもまたこの流れに棹さした一人であり、のちに彼は自伝の中で当時を観てこう記している。

マルクス主義は全く新たな思想形態を意味した。それはロシア・インテリゲンチヤの危機であった。90年代の終りに、他の革命的インテリゲンチヤの諸潮流に比べはるかに高い文化水準を有するマルクス主義の潮流が形成された。これはのちのポリシェヴィズムの母体となったタイプにはあまり似

ていなかった。わたしは批判的マルクス主義者になった。このことはわたしが哲学において相変らずイデアリストであることを可能にした。古い世代の革命家にとって革命は宗教だった。わたしにとって革命は宗教ではなかった。(『自己認識——哲学的自伝の試み——』125ページ)

ベルジャーエフのマルクス主義批判は彼のロシア・インテリゲンチヤ批判の一環をなす。彼もまたインテリゲンチヤとナロードの乖離にロシア社会の病根を見、インテリゲンチヤにナロードへの回帰を呼びかける点では古きスラヴ主義者と変りはない。問題は回帰すべき「ナロード」のイメージである。ベルジャーエフにとって「ナロードへの回帰」は、あるがままのナロードへの回帰ではありえず、ここにおいて彼は既往のナロード跪拝と袂を分つ。彼にとってはナロードもまた生れ変わるべきなものであった。インテリゲンチヤのナロードへの回帰は、先ずインテリゲンチヤが過去におけるナロードの呪いから自由になることによつてのみ可能である。ナロードの内なる悪しき前近代性への跪拝、個を全の内に埋没させんとする、ロシア精神にとってすこぶる根強い傾向——これをベルジャーエフは徹底せる近代主義の立場から批判する。こうした批判はドストエフスキーやトルストイすらもなしえなかったもの、「首尾一貫した西欧主義者」の20世紀における出現を俟ってはじめて可能な批判であり、それゆえロシアにおけるよき近代精神の発展にとってはなほだ貴重であったが、歴史はやがて、古きナロード跪拝にプロレタリアート跪拝を重ね合せたポリシェヴィズムにより、ロシアのこの近代を押し流してしまう。

左右さまざまな思想潮流との熾烈な論争から生れたベルジャーエフの評論集『インテリゲンチヤの精神的危機』は1910年の刊行である。ここでは1905年の革命と1914年の大戦勃発のこの中間期に焦点を合せ、この近代主義

者が伝統的な「インテリゲンチヤとナロード」の問題をどのように解こうとしたか見てみよう。

II

1907年の論文『革命の心理』（1910年刊『インテリゲンチヤの精神的危機』所収）の中でベルジャーエフは言う。

わたしは自らを立憲主義者と呼ぶことはできない。なぜならわたしは唯一の救いの道としての理想的憲法の存在を信じず、そこから奇蹟を期待せず、立憲体制の内に何ら有機的・現実的なものを見ず、むしろ機械的接合を見るからであり、宗教的中心を見失ったナロード有機体の瓦解の反映を見るからである。わたしの信念はまたデモクラートのそれでもない。なぜならわたしは民主政治（あるいはナロード主権 *народовластие* の原理を宗教的見地から拒否し、人間的個人 *личность* の権利の保障をナロードの意志・人間の意志の内ではなく、神の意志の内を探すからである。（傍点引用者）

いっぽうロシア・インテリゲンチヤにとってナロードは神であり、完全なナロード主権すなわち民主政治は彼らの夢であった。彼らは被抑圧階級を、すなわちナロードニキは農民を、マルクス主義をプロレタリアートを「ナロード」として崇め、この「ナロード」の意志の完き表現を求めて完全なナロード主権を要求した。しかしベルジャーエフは、インテリゲンチヤの唱える、とりわけマルクス主義者の唱えるナロード主義の理念の内に二重の虚偽を見る。一つには、その「ナロード」が真の意味でのナロードではないからであり、二つには、そこにあつて主権が絶対的な神の意志ではなく、恣意的な人間意志に委ねられているからである。

先ずナロードの意志とは何か。そもそもナ

ロードとは何か。ベルジャーエフにとってナロードとは、特定の階級・階層のことではなく、また個々人の機械的集合のことでもない。

ナロードとは神秘的有機体、あるリアルな超人間的統一体である。この神秘的有機体が完き生を生き、完き意志を有するのには、歴史のポジティブで創造的な有機的時代においてのみであり、ネガティブで分裂した危機的時代にあつては、ナロードと呼ばれるこの有機体も亦分裂崩壊しており、これを捉えることは容易ではない。それは統一を欠いている。（『新たな宗教意識と社会性』52ページ。傍点原著者、以下同）

歴史の有機的時代、危機的時代という概念は、ベルジャーエフによりサン＝シモンから借用されたものである。

ベルジャーエフにとってナロードの意志とは個人の意志の単なる集計以上のもの、言い換えれば、単なる人間意志以上のものである。ナロードとは、単一の目的・単一の愛を有する或る種の神秘的有機体・統一体であり、その現実性とは経験的に知覚されるものではなく、理念によってのみ捉えうる。実証主義はその本性からして唯名論的であり、普遍的なものの現実性を信じないがゆえに、ナロードの現実性を否定し、秘められた有機体としてのナロードの理念そのものを廃する。経験的には捉えられず、信仰の対象でしかありえない種類の現実性は、実証主義者にとっては存在しない。たしかに、分裂とアトム化の時代にこの神秘的有機体を見出すことは容易ではない。外的目的から人々に抽象的・功利的結合を強いるいかなる国家の内にも、ナロードの意志は自らの等価の表現を見出しえない。たとえその国家が議会制度と理想的普通選挙制度に基づき、ナロード主権を体現するものであろうとも。民主政治とその代議機関は、分裂の時代・危機的時代におけるナロードの有機的意志の代用品にすぎない。ナロードの

意志は機械的・無機的・功利主義的ではなく、有機的に統一さるべきものである。すなわち、ベルジャーエフがA・ホミャコフ、И・キレエフスキー等初期スラヴ主義者たちから受け継いだ用語によれば、ソボルヌイ соборный なものでなければならない。ソボルヌイ соборность (形容詞 соборный の名詞形) は人間の社会生活における、神の意志に基く有機的結合を意味する。有機的意志である真のナロードの意志には常に内容・対象があり、それゆえにこそソボルヌイであり、そこには人間的意志の量ではなく、超人間的意志の新たな質が開示される。神秘的・有機的統一体としてのナロードは神の意志を体現するのであり、その意味で真のナロードの意志とは神の意志である。真のナロードの意志のあらわれは宗教的ソボルヌイの内に、神の名による人々の結合の内に、教会の内にのみ求めることができるのであって、国家の内にはない。人間同士の教会による結びつきの社会的実現が、すなわちテオクラシーである。真のナロードの意志とは、回復された有機的統一体としてのナロードの存在を前提し、このようなナロードの意志をこそ言うのであり、この真の意味でのナロードの意志をあるがままの経験的なナロードの意志ないし欲望と混同するのは、危機的時代であってあまりにしばしば繰り返される誤りである。

現代の所謂民主政治、すなわち普通選挙、議会主義、その根本理念としてのリベラリズムなどは、量が質を食い尽くした危機的時代の産物にほかならない。この上なく完全な選挙制度、つまり平等・無記名・直接の普通選挙から得られるものも、所詮個々人の意志の機械的集計、その算術平均であって、ナロードの意志の神秘的一致点ではない。人間的個の意志は無機的集合により押し流されるが、かといってソボルヌイな意志が捉えられるわけではない。個の意志の質は量的合計の内に消え去り、それゆえ全ナロードの意志とい

う質も現れえぬまま、機械的・算術的結果がナロードの意志と詐称される。同じことが議会主義政治についても言える。

議会主義は、統一的なナロードの意志が消え去り、崩壊し、抽象化し、ナロードの生が唯一の中心に向うことをやめ、単一の意味を見失った歴史的一時代の政体である。ナロードの意志の内なる実質的統一の欠如したところでは自ずと形式的統一が勝ち誇り、自己目的化される。すなわち、内的真実を外的法秩序によって置き換えんとする試みがなされる。人々はもはや愛による結合を欲せず、何としてでも自らを隣人の干渉から守ろうとし、無機的な孤立に閉じこもる。リベラリズムがその形式的無内容性・極端な抽象性において勝利し、疑問の余地ない真実からしばしば虚偽へと転落する。(同上、53ページ)

リベラリズムには人間的個の尊重、その尊厳と自由の擁護という疑いのない真実がある。この真実は『人権宣言』の精神と、つまり超人間精神のあらわれである基本的人権の理念と結びついている。しかし他面、リベラリズムの捉えうる人間的個の自由とは未だ形式的自由すぎず、そこに実質的自由の何たるかは示されていない。それゆえリベラリズムは個人の自由への固執において容易に形式主義に墮する。そして政治における形式主義とは虚偽である。絶対的形式主義である法規主義 законничество は、その抽象化された形態において非人間的なものへ、神的ならざるものへと転化し、法の滅却へと行きつく。法律はその抽象的性格のしからしめるところにより、不可避的に国家に従属するからである。憲法は国家や革命と同じく偶像たりうる。

政治的形式主義の泥沼に落ちこんだ現代は、そこからの脱出の道を探し求める。すなわち、「完きナロードの意志(完全平等の普通選挙権)から出発して、完きナロード主権(民主

的共和制)へ行き着く」(『Sub specie aeternitatis』420ページ)。これは急進主義の究極の理念であるが、同時に形式主義的政治の克服ではなく、その完成である。

完きナロード主権は人間的個の諸権利と両立しえない。なぜならそれは、人間的個とその自由への権利を人間の主観的恣意に委ねることがあるから。人間の恣意は自由と権利を欲することもあるが、また欲しないこともある。しかるに人間の自由と権利は絶対的なものであり、人間がそれを欲するがゆえに人間にとって必要なのではなく、神が人間に対しそれを欲するがゆえに人間はそれを有さねばならぬ態のものである。人間の自由とは、人間が恣意的に放棄しうるものではない。人間の自由と権利を絶対不壊のものとして定めたのは、人間の意志を超えた至高の意志・神の意志である。人間意志が至上のものとして神化される時、すなわち、ナロード主権(民主政治)に至上権が賦与される時、そこでは人間的個の意義も含めた一切の絶対的価値は認められず、人間的個の諸権利は国家への有用性によってのみ評価されざるをえない。ナロードの意志・ナロードの権力は、いつでも好きな時に法を、すなわち人間的個の自由と権利を侵すであろう。ナロード主権の理論を創始したJ=J・ルソーは、この権力に至上権を認めたがゆえに、人間的個に対し絶対不可侵の権利を認めることができなかった。フランス革命は『人権宣言』を高唱しつつ、同時に自ら絶えずこれを踏みにじった。マルクス主義者にいたっては、プロレタリアートの利益のためには個人のいかなる権利も無視すると公言して憚らない。すなわち、「ナロード主権の形式的原理の内には、言い換えれば、ナロードの意志が完き勝利を収めたとしても、そこで自由が勝利し、人間の権利が尊ばれ、個人が単なる手段と見做されなくなるという保証は未だいささかもない」(『新たな宗教意識と社会性』48ページ)。ナロードの運命はナロード自身にきめさせれば全てはうまくゆく

であろうとし、ナロードの意志に全てを任せんがため民主政治の実現のみを専らめざす政治理念を、ベルジャーエフは政治上の形式主義として排する。政治、道徳、芸術、科学等、本来統一的・有機的生の一機能であるべきものが独立し自足的な存在と化すことにより、有機的生を破壊するに至る現象を、ベルジャーエフはB.J.・ソロヴィヨフに倣い「あるものが抽象的原理と化する」と呼ぶが、この政治上の形式主義は、現代にあつてかくも特徴的な、政治が抽象的原理と化したことのあらわれであり、人々はこの原理の空虚さに気づいていない。

完全なナロード主権はナロードの自己神化へ、すなわち、人間より高次ななにももの認めず、いかなる絶対的理念も認めない人間意志の神化へと導く。しかるに、自らを神化し、人間を超えた何ものも欲せず、より高次の何ものも崇めまいとする人間意志とは空虚で無内容であり、虚無へと落ちこむ。[……]意志は人間的なものよりも高次の実在をめざさねばならず、その時はじめて自らの内に絶対的価値を宿しうる。(同上、49ページ)

人間が自らの名においてのみ行動し、自らの人間的意志のみに固執しこれを神化する時、人間は人間性を喪失する。ベルジャーエフにとってこれは実在の法則である。彼はフォイエルバッハ流のヒューマニズム=人類教を拒否するのであり、これに類する文章は彼の著作の中で枚挙に遑ない。1908年の論文『ロシアの求神者たち』から引こう。

最終的な解放は神=人的なもののみありえ、最終的な喜びは神の内にものみ可能である。[……]革命のヒューマニスチックな側面、人間の隷従からの解放、人間と人権の絶対的意義の確立は、神=人的真実に属する。しかし抽象的なヒューマニズム、他

を排することによって自らを確立するヒューマニズム、人間的なものを神化するヒューマニズムは、無神のみならず没人間性に転化する。[……] 不可侵な人権の理念、人間的個の無条件的価値の理念自体、抽象的ヒューマニズムの基盤の上にはうち立てられえず、不可避的により高次の超人間的意志を前提とする。神と神人を斥けることは、同時に、神的理念としての人類と人間を斥けることである。あるがままの、自然のままの人間とは、未だ動物であり、自然の衝動のひこばえ、死と腐朽の子であり、未だ人格ではない。(『インテリゲンチヤの精神的危機』36ページ)

さらに、1908年の論文『メキシコフスキーと革命』から。

ヒューマニズムの内にキリストの宗教と結びついた無意識的な宗教的真実があることは争いえぬ事実であり、これをわたしはいささかも否定しようとは思わない。しかし19世紀においてヒューマニズムが人類の宗教に移行するや、それは明かに反キリスト教的なばかりか無神的な道へ踏みこんだ。人権宣言の内には聖神 *Дух* の息吹きが感じられる。そもそも人権宣言の歴史的起源とは宗教的なものである。人権とは人類の宗教のことではないばかりか、この偽宗教とは対蹠的なものである。人権は超人間的・神的起源を有し、それゆえ人権の内には神人的真実の萌芽がある。人類の宗教に基づく革命は一切の超人間的なものを斥けており、そこに精神の息吹きが発現するとしたら、それは革命が人間的なものの神化を断念する限りにおいてであろう。ある意味で拜火教は人類教より宗教的に高いのである。(同上、108～109ページ)

1906年の論文『デモクラシーと俗物根性』から。

たしかに人間は目的であって手段ではない。人間は絶対的価値を有する。これは大いなる真理であるが、しかし最後の真理ではない。超人間的な一切の価値を斥けた人間、聖なる神殿に、永遠の価値ある書物に、偉大なる名に、美しい事物に跪くことをもはや希わぬ人間、美と高貴さの前に、叡知の前に、生ける歴史の内に開示される永遠の前に敬虔たりえぬ人間、自己を神化し、「人間的なもの」を自らの最後の聖物と見做す人間は、無であり、空である。(『Sub specie aeternitatis』413ページ)

純粋完全なナロード主権＝民主政治とは、人間意志の神化であり、世界史を完全に人間的欲望の支配に委ねようとするものである。無制限な専制と無制限な民主主義の違いは、前者にあっては一人の人間意志が神化されているのに対し、後者にあっては全人の人間意志が神化されているだけの違いである。

一人の権力の神化に代えるにナロードの権力の神化をもってするのではなく、一切の人間権力に主観的ではない客観的制限を、人間的ではない超人間的制限を設けねばならない。制限さるべきは一人ないし数人の権力ではなく、全人の権力である。なぜなら、恣意的で偶然的で強圧的でしかありえぬ人間権力が世界を支配すべきではないから。いかなる権力の制限も、人間的主観の機械的集計としてのナロードの意志の仕事ではありえない。(『新たな宗教意識と社会性』50ページ)

人間意志の神化としてのナロード主権は、「人間的権力をその完き無内容性において肯定することにより、ナロードの意志(形式)をナロードの真実(内容)から切り離す」(『Sub specie aeternitatis』422ページ)。ベルジャーエフにとって重要なのは、ナロードの意志ではなく、この意志の内容、つまり、この意志

が何を欲するかであり、ナロードの権力ではなく、この権力が何をめざすかである。彼は現代の内容空虚な形式的世界観を実質的世界観によって克服せねばならぬと考える。ナロードの意志をナロードの真実から切り離して形式的に理解することが人間意志の自己神化を招き、人間社会をその果しない分裂に陥れた。政治に携る全ての人間が、保守主義者も、穏健自由主義者も、革命家も、例外なく政治上のこの形式主義に陥り、政治の、ひいては生そのものの目的と内容を見失い、自らの主観的恣意以外に目的となりうるものを知らず、この地上での人間的な、あまりに人間的な欲望の充足に血道を上げているのが現状である。政治は単なるナロードの意志に基づくのではなく、義しいナロードの意志に基かねばならない。ナロードの意志への跪拝は、偶像化されたあるがままのナロードの意志への跪拝ではなく、神の意志への跪拝でなくてはならない。言い換えれば、政治の根底には形式的真実ではなく、実質的真実が据えられねばならず、この真実、すなわち政治を越えた生の目的・生の意味が見出されねばならない。人間的主観は同時に超人間的客観とならねばならない。生の目的ならぬ手段が政治の根底に据えられ、政治の目的となる時、政治そのものが目的と化し、生は政治に従属してしまう。生の真の意味・生の目的が見出され、それが政治の根底に据えられる時、政治は生の一手段として本来あるべき機能を果すであろう。現代に弥漫し、革命と反動が一様に感染している政治至上主義は、自ずと解消するであろう。人類の福祉とはこれに比べれば副次的問題にすぎず、人類の福祉が政治の目的となること自体、生の内容の喪失に由来する政治的形式主義のあらわれである。

III

こうした現代政治の現状にとって、ここにひとつ特徴的な現象がある。すなわち、ロシア社会民主主義者（ロシア・マルクス主義者）

のこの問題に対する態度である。彼らはナロードの意志の完き実現を唱え、完全平等の普通選挙による憲法制定会議の開設を主張するが、そのくせ、ナロードのどんな意志にでも従うわけではない。もしもナロードの意志がプロレタリア的・社会主義的信仰に則って欲すべきものを欲しなかった場合は、たとえその意志が形式的に完璧な手続を経て表明されたものであろうと、これをボイコットする。すなわち、彼らにとって救いは形式的ナロード主権の内にはない。形式的民主政治の実現をもって事足りりとするリベラリストを彼らは嫌悪する。社会民主主義にとって重要なのは、ナロードがその意志の内容においてプロレタリア的たることである。プロレタリアートの内のみ真のナロード・真の人類を見、プロレタリアートの意志を未来の人類の意志として神化している社会民主主義者にとっては、プロレタリアのみがあるべきまともな人間であるから。すなわち、社会民主主義者の政治に対する態度の内には、ナロードの形式的意志からその実質的内容へ赴かんとする志向、形式的政治から実質的政治への志向が現われており、この意味で彼らは彼らなりに現代政治の内なる形式主義の空虚さを感じ取っており、ここに彼らの力が存する。しかしここにまた彼らの矛盾も存する。真の内容には彼らは決して到達しえない。なぜなら、社会民主主義的宗教の内容とは、来るべき人類の意志の神化という形式主義にほかならず、この宗教の客観的理念は無内容だからである。その神が神化された未来の人類であって、そこに人間を越えた何ものも志向されていない以上、人間意志は自らを神化して虚無へ行き着く以外にない。そこに結果するものは、目的を知らぬ支離滅裂な人間意志の相も変わらぬ強圧による結びつきでしかありえない。

IV

ベルジャーエフにとって、回復された有機的統一体としてのナロードとはソボルヌイ

な個性 *личность* であり、この生きた有機体としてのナロードは、他のナロードとの関係においてナーツィヤ *нация* (英仏語 *nation*) とも呼ばれる。ナロードないしナーツィヤを国家と混同するのははなはだしい誤りである。ナーツィヤは生きた有機体・実体 *существо* であり、国家はこの実体の一機能にすぎない。国家はナーツィヤの副次的・一時的・相対的機能として、歴史的にのみ評価されうる。専制国家はそれがナーツィヤに役立ち、ナーツィヤを崩壊から守りうる限りにおいて存在理由を有していた。革命を起し、政府を打倒するのはナーツィヤであり、さらにこの革命がナーツィヤの有機的発展を妨げるような場合は、この革命をも打倒する。

国家は統治の強圧的形態であり、ナロードの意志の悪しき裏面であり、敵なるナロードに対する防衛形態である。ナーツィヤは個人同様自らを主張し、死から、他による併呑から自らを守る。これは聖なる自己主張であり、神から与えられた生の本能である。世界における一回限りの事実としての自らの実在の防衛のためには、諸ナロードが未だ友愛と平和に到達していない限り、ナーツィヤの外的武力が不可欠である。[……] 国民性の内にも人間は自らを実現するのであり、また人類もしかりであろう。

国民性の埒外に生きた有機体はなく、コスモポリチズムにおいて一切は死せる抽象と化する。(『インテリゲンチャの精神的危機』123ページ)

ベルジャーエフは敗戦主義を弾刻する。1905年の日本との戦争の際、多くの左翼インテリゲンチャがロシアの敗戦を希った。ベルジャーエフはこの戦争の非倫理性と反ナロード性を承知しつつ、やはり心からロシア軍の勝利を希った。彼にとって自己の実在をナーツィヤの実在から切り離すことは不可能だったのである。ベルジャーエフにとってナーツィヤは、国家や階級よりもはるかに深く、根元的である。国家権力がナーツィヤに従属し、その有効な一機能と化す時、国は偉大となる。それに反し、国民的・愛国的感情が国家の下僕となりこれを跪拝する時、ナーツィヤの没落が始る。ベルジャーエフによれば、「人は国家主義者でも帝国主義者でもなく、愛国者でなくてはならず、この語の至高の意味における国民的感情を身につけねばならない」(同上、123ページ)。ナーツィヤは内政においては碎け散ってしまうが、対外政策においては単一のものとして現れるのであり、このナーツィヤを感じえぬことは、ロシア・インテリゲンチャの精神的頹廢のひとつのあらわれにほかならない。(未完)

Conception du peuple chez Berdiaev (résumé)

AOYAMA Taro

“Je ne suis pas démocrate, dit Berdiaev en 1908, car je refuse, du point de vue religieux, le principe de la souveraineté du peuple (narodovlastie). Je ne cherche pas la garantie des droits de la personne (litchnost) dans la volonté du peuple, volonté humaine, mais dans la volonté divine.” Pour l’intelligentsia russe, par contre, le peuple était leur dieu, la souveraineté parfaite du peuple était leur rêve. Berdiaev voit un double mensonge dans l’idée de la “souveraineté du peuple” réclamée par l’intelligentsia, surtout par les marxistes. Car, premièrement, ce “peuple (narod)” n’est pas le peuple authentique. Deuxièmement, la souveraineté est là confiée à la volonté humaine et arbitraire.

Le “peuple” signifiait la paysannerie pour les populistes (narodniki), le prolétariat pour les marxistes, c.-à-d., il signifiait toujours une classe particulière. Mais pour Berdiaev, le peuple est un organisme mystique, une certaine unité réelle et surhumaine. La volonté authentique du peuple présuppose le peuple en tant qu’unité organique restaurée. On confond trop souvent cette volonté authentique avec la volonté ou le désir empirique du peuple tel quel.

La souveraineté parfaite du peuple est incompatible avec les droits de la personne, car elle signifie abandonner la personne et ses droits à la merci de la volonté subjective humaine. Il arrive que la volonté humaine veuille la liberté et le droit, mais il arrive aussi qu’elle ne les veuille pas. Quand la souveraineté est reconnue au peuple, il en résulte inévitablement que toutes les valeurs absolues, y comprise la dignité de la personne, sont estimées selon leur utilité pour l’Etat.

On dit que tout ira bien quand le peuple décide son propre destin, et on aspire à la réalisation de la démocratie parfaite afin que tout dépende de la volonté du peuple. Berdiaev refuse ce formalisme. La souveraineté parfaite du peuple n’est autre chose que la déification de la volonté humaine. Cela signifie abandonner l’histoire mondiale complètement aux désirs humains. La différence entre l’autocratie sans restriction et la démocratie sans restriction consiste en ce que la volonté d’un individu est déifiée dans la première, tandis que la volonté de tous les individus est déifiée dans la dernière. La politique doit se baser non seulement sur la volonté du peuple, mais aussi sur la volonté *juste* du peuple. Non pas la volonté formelle, mais la vérité substantielle doit être mise au fondement de la politique. Il faut trouver cette vérité au-dessus de la politique.